

岐阜聖徳学園大学教育学部准教授

音楽専修・村田睦美

みなさんは「ピアノ」の正式な名前をご存知でしょうか。この名前には深い意味があります。バロック時代に使われていた鍵盤楽器はチェンバロでした。

チェンバロは、プレクトラムと呼ばれる爪が弦をはじくことによって音を出す楽器です。今から300年ほど前に、イタリアのチェンバロ職人、クリストフォリによって、弱く静かな音から強い音まで、弾く人の求めに応じて自由に出せる画期的な鍵盤楽器が生み出されました。楽器は「クラヴィチェンバロ・コル・ピアノ・エ・フォルテ」と名付けられました。

ピアノの響き 今も創造の源

それが、名前の後半部分のみの「ピアノ・フォルテ」となり、さらに省略され「ピアノ」と呼ばれるようになりました。ハンマーが弦を打つという構造から、単に強弱だけではなく、クレシェンド、デクレシェンドなど、それまで出来なかったこと、経験したことがなかったことが可能になりました。

これによって、作られる音楽の世界が拡大し、あらゆる音楽の構成、内容、表情が無限に広がり、新しい時代の音楽表現に可能な道を拓くことになりました。

ピアノは、繊細な心のあやを表現できる旋律楽器として、また、オーケストラ全ての楽器の音域をカバーする88の鍵盤により、多くの音を同時に出せる和声楽器としての道を確実に獲得しました。さらには強靱な音響により、一人で演奏できる独奏楽器としての道も。多くの作曲家がピアノから刺激を受け、自己表現に情熱を傾倒します。ピアノ独奏曲の作曲は欠かせないものとなりました。

ハイドン、モーツァルト、ベートーベンは、ピアノ独奏曲の創作に情熱を傾け、素晴らしい芸術的表現を果たしたことで、とても大事な作曲家です。中でも、ベートーベンは、「悲愴」、「月光」、「ワルトシュタイン」、「熱情」をはじめとする32曲のピアノソナタによって、人間精神の奥深く潜む心の姿を音に刻む結果をもたらしました。

それ以後、シューマン、ショパン、リストなど、著名な作曲家から現代の作曲家に至るまで、ピアノによせる期待と試みは尽きることなく続いています。

多くの楽器が歴史の中に埋もれ消滅していった中であって、ピアノは、誕生から現在に至るまで絶えることのない響きを今に続け、作曲家の琴線に触れ、創造をもたらしています。